

★世界中で安全であると評価されている舞台裏

この舞台裏を造り上げた巨大製薬企業の戦略（「病気のブランド化」）がなまなましく記載されていて大変興味深く読みました。科学とは何かを真剣に考えるきっかけとしたいです。HPV ワクチンが普及して10年以上高い接種率を誇るイギリスやオーストラリアにおいて、このワクチン接種世代において、むしろ子宮頸がんが増えているとのデータがあります。このワクチンの真実が明らかにされることを願うとともに、今、このワクチンの副反応被害に苦しむ子たちの治療方法の確立に国も製薬企業も医師も科学者も真剣に取り組むべき時がきたと痛切に感じます。

★ 翻訳なのに読みやすく淡々と事実が語られて自分の頭で考えながら読める

前提知識がなくても、用語の解説が豊富で分かりやすい。そして翻訳なのに日本語がこなれていて、とても読みやすい。

淡々と事実が語られていく文体で、読みながら自分の頭で考えていくことができる。

有効性を示す根拠とされている臨床試験の裏で、データの1人となっている生身の女性に、こんな健康を失い、人生が変わることが起こっていた。ショックだった。試験ではプラセボが安全な生理食塩水と言われていたのに、本当はアルミニウムの溶液だった。

お仕事や人間関係、偉いお医者さんが勧めているとかじゃなくて、まっさらの目で読んでほしい。人間はウイルスを含む自然になかなか打ち克つことが難しい。人間も自然の一部で、環境をコントロールしきれない。コロナを考えてみても、より安全な方法でウイルスと共存し、感染しても重い病気にならないように、した方がいいのではないか。子宮頸がんだったら検診とか。魔法の薬

★ 原題は「裁判にかけられる HPV ワクチン」

これが本書の原題である。「裁判にかけられる HPV ワクチン –裏切られた世代のために正義を求めて」とでも訳すべきか。

まず、本書はいわゆる「ワクチン反対派」の宣伝本ではない。著者らは法学研究者、弁護士、医療専門ジャーナリストであり、本書の目的は、インフォームドコンセントにより「人々が HPV ワクチンについて正しく情報を得たうえで決断を下す」のに役立つことであるとされている（「まえがき」）。

実際、本書は HPV ワクチン推進派も含む膨大な医学論文や症例情報が引用して、ワクチン開発、臨床試験、市販後の各段階での検討を行っており、その上で HPV ワクチンの有効性と危険性のさらに深い科学的論争と、副反応被害者による訴えを紹介している。

第5章の「異議の高まり」で紹介されている事例は、日本、デンマーク、アイルランド、英国、コロンビアの5カ国であるが、この中には裁判ではなく行政や医薬品規制当局への申立も含まれている。日本については、日本語訳にあたり原書の情報を更新したとのことである。また、日本語訳には基本用語の解説も付されており読者の理解を助けている。

HPV ワクチン（子宮頸がんワクチン）は「がんの予防に効くワクチン」をうたい文句に全世界で巨大製薬企業により販売され、行政により半ば強制的に「推奨」されているところもあるようだが、その有効性についてはあくまでも「前がん病変」の予防までで、HPV 感染後数十年後に発症するという子宮頸がんの予防までは証明されていない。しかも、本書によると、近時の研究では前がん病変の 39.5%、がん病変の 33.5%にしか HPV の存在が確認されなかったという報告があり、HPV ががんを引き起こすことさえ疑われているという。他方、本書に多数報告された HPV ワクチン副反応の症例には極めて深刻なものや死亡例まで含まれている。その多くは多様な痛みや運動機能障害、さらには認知機能障害に及び、重篤な症例では長期の車椅子生活を強いられている。副反応の発症機序にはワクチンに含まれるアルミニウムアジュバント（免疫反応強化のための添加物）の関与や過剰な抗原抗体反応による自己免疫疾患が疑われている。

これに対する製薬企業や行政当局、ワクチン推進派の対応はどの国でも共通している。すなわち、ワクチンと副反応の因果関係を否定し、心身症などの他原因、さらには詐病まで疑う。被害者団体に対しては「反ワクチン派」のレッテルを貼って相手にしない等々である。しかし、多くの国で膨大な数の被害者が共通の症状を訴えて苦しんでいる事実を心身症などの理由によって排斥することはできないであろう。

正確な情報提供と科学的検証により、被害者救済を行うべきである。

★ 読み出すと一気に引き込まれる本

「HPV ワクチンの安全性は世界的に認められている」「副反応被害だと騒いでいるのは日本だけ」

と、よく言われる。

しかし、本書を読むとそれは事実ではなく、デンマーク、アイルランド、英国、コロンビアといった諸外国でも、HPV ワクチン接種の後の副反応に苦しむ少女たちが多くいることがわかる（本書第 25～28 章）

インドでは、HPV ワクチンの臨床試験における女児の死亡や不備が問題になり、2013 年に連邦議会の委員会が報告書を提出した。現在、最高裁判所に HPV ワクチンの許可を取り消すよう求める請求が係属中なのだという（第 12 章）

400 頁を超える大著だが（註も多い）、読み出すと一気に引き込まれる本である。